都市デザイン研マガジン　vol.69
Urban Design Lab. Magazine
2008.2.25
東京大学都市デザイン（西村・北沢）研究室
工学部都市工学科／工学系研究科都市工学専攻
http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/index-j.html
編集長　：塩澤諒子
編集委員：石井宏典　蛎灰谷愛　平岡惟
増田圭輔　矢原有理　ファリス・ジェイ

M2修士論文発表

全てをこの瞬間に凝縮させて―1年10分の法則―

text_shiozawa

修士論文提出から1週間後の2月13日、修士論文の発表、そして審査が行われた。朝一のトップバッターは後藤、そして竹山、石井が続く。この発表に自分の研究成果を全てこめて、伝えきれるか。直前まで何度も何度も推敲し、頭の中で反復する。そんな入念な準備こそが、人に伝わる力を持つはず。と、ここでは発表の準備が不十分だった自戒の念をこめて。

発表前日、研究室には緊張の空気が漂っていた。ここ数日はほとんどのM2は学校に寝泊りしつつ、朝に夕に頭を悩ませていた。ついに明日と迫っていつもは10階の共有机で夕食をとるのが習慣になっていたが、その日はそれぞれに黙々と作業を続ける。発表当日、14号館141教室には続々と人が集まった。発表の後には教授陣からの質問に果敢に受け答えをする。それを後ろの席で我がことのように神妙な面持ちで見守るデザ研メンバー。こうして無事、全員発表を終えた。

ほっと一息、疲れきった様子を滲ませながらも、何とかやり遂げた安堵感と一先ずの開放感に浸りながらM2一同は神保町の中華料理屋へ。ビールで乾杯、紹興酒も進むなか、それぞれ自身の自己採点。65点、70点、等々微妙な点数が続いて完全には満足できなかった様子が各々伺えた。言いたいことを短い時間で伝える難しさを特に感じた今日のこの日。「1年10分の法則」という西村先生の言葉に納得。修士論文1年取り組んだとして言いたいことは発表は10分で伝えられるはず。だから博士論文は発表30分。なるほど。10分の重みを感じました。

上）伊藤、スーツで決めます。
下）石井、小豆島を語る。

博士論文審査会

田中暁子、集大成お披露目

博士1年　江口久美

2月20日、田中暁子さんの博士課程最終審査会が行われました。論文タイトルは「ポスト・オスマン期のブリュッセルにおけるシャルル・ビュルスの都市美理念とその実践に関する研究」発表には多くの研究室メンバーが駆けつけ、期待の熱気が漂う中、スタートしました。内容は、ポスト・オスマン期におけるビュルス氏の役割を、詳細に歴史と事実を追うことで明らかにしたもので、歴史が紐解かれるにつれ、まるでひとつの大河ドラマを見ているかのような素晴らしい発表でした。質疑も、先生方からのお褒めの言葉が多くかかり、質問にも詳細かつ的確にお答えされており、完璧な審査会でした。田中さん、お疲れ様でした。

終わってみて、感想は？との質問に「12月の提出からが長かった」と振り返る田中さん。研究室では隣の席の博士1年楊さんは「元気のないときはわかるから密かに心配なときもありました。」と横で暖かく見守っていた様子。発表が終わった次の日にもまだまだ論文修正に余念がないのはさすが。ビュルスへの愛はきっと右に出る者はいません。

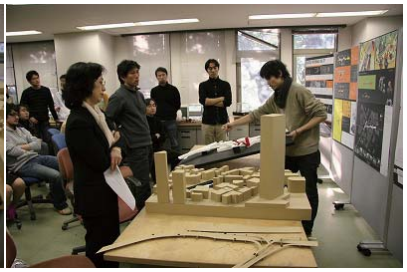
text_shiozawa

都市工学部卒業論文・設計審査会

卒業設計講評会

M1 大道　亮

2月19日に行われた卒業設計の講評会。我らが都市デザイン研究室の４年生のうち、設計を選択したのは柴山くん、中島くん、クワンくん、山崎くんの４名。根岸くんと香川さんは論文を提出しました。余裕を持って講評会に臨んでいた人、寝不足で目を真っ赤に充血させながらプレゼンテーションしていた人、教授陣の厳しい突っ込みにたじろぐ人、受け流す人。12分の使い方は皆それぞれでしたが、どの作品にも“こだわり”を感じました。特にパネルや模型はカッコ良かったです！４年生のみなさん、本当にお疲れさまでした。



いろんな人に助けてもらいました。
先生方の助言、最後まで手伝ってくれた人、有難うございました。中島和也

柴山浩紀くん

予想以上にお金はかからないけど、
時間はやっぱり必要でした。
山崎哲

無謀にも「卒業制作」を一人でやろうとしてしまいました。ということを今になってつくづくと感じま。確かに大変な部分があったが、楽しかったことも沢山ありました。それは自分なりに「ゼロから考えて物を作って行くプロセス」を体験できたことだと思います。この体験は自分の貴重な体験になるのではないかと思います。最後に、西村先生と中島さんと野原さんからの色々なご指導やご指摘に対して心からのご感謝を申し上げます。

グェン・ヒュー・クワン

卒論を通じて、初めて自分で社会の特定の分野をじっくりと調べることができた気がします。少しずつ全体像明らかになる一方で、わからないことも見えるようになりました。そのような中でも自分の目指すところに焦点を当てて進んでいくという作業は面白いものでした。今回は知的障害者のバリアフリーを対象としたことで、自分のやるべきことの対象者が明確に定義されました。今までの演習では、誰のための計画なのか、誰の利益を汲み取るべきなのか路頭に迷っていました。都市工というとすべての人を対象にしようとしがちですが、誰かの利益の代弁者というスタンスもあるのだということがわかりました。とはいえ、そのような数々の利益団体の意見を調整するのが都市工だという命題もまた真なりという気もしますが・・・根岸勇太

中島直人が綴る石川栄耀と美観商店街「東京人」no.252 march,2008

text _shiozawa

『東京人』3月号で組まれた特集「商店街の歩き方」。その中で中島助手が筆をはしらせたのは、博士論文の中でも中心人物のうちの一人として登場する石川栄耀のまちづくりの思想について。寄稿に当たっては原稿依頼から締め切りまでが半月ほどで間にお正月をはさんだため、年末年始もなく、また商店も年末年始は休業、写真を撮るのが一苦労だったという。数多くの論文も執筆している中島助手ですが、今回の雑誌寄稿との違いについてひとこと。「やっぱり一般誌だと、読者からの反響がある点がよいです。ネットのブログなども含めてですが。学会誌の論文だと、まず、そうした意味での反響はないですから。」今後も一層多方面での活躍が期待されます。

編集後記にかえて

text _shiozawa

デザ研マガジン的イデオロギー

が、ない。とのご指摘を昨今しばしば受けます。あまりに事後報告的になってないですか、とか、思想がない、とか。思い返せば一年前、席替えについて物申す！という記事を坂内編集長が書いたところ、なんて内輪ネタだと一部にご批判を受けたものですが、(この記事が思想かと言われたらまたそれも違うのでしょうけれども)それくらい、何かを訴えるくらいの勢いが今のマガジンにはないと。ふと思いついて2年前、私がマガジン編集部員になって初めての編集会議で坂内編集長が用意してくれたレジュメを見てみると、なんと冒頭には「マガジン発行の理念」が記されておりました。

1、研究室活動を、世界に向けてタイムリーに発信する紙面
2、官報的でない、人間的であたたかみのある紙面
3、3行記事を基本とした、シンプルで読みやすい紙面

1は、最近遅れがちですがなんとか。2、どうでしょうか。3については全くです。デザ研マガジンも3年、今年に至っては人員拡大、英語版発行と、体制が整いつつありました。しかしながら一方で、拡大した編集部には確かに確固たる方向性なり姿勢なりは薄かったように思います。というか、「世界に向けて発信する」ための客観性をもちつぎたということでしょうか。ある程度の偏りと主観性が「思想」あるマガジンになるとしたら、まずはそうあるべしと意識するところから始めねばです。

ただ、何はともあれ、読者ありきのマガジンです。
ご愛読いただいている皆様からのご意見、お待ちしております。
私はこの3月をもってマガジン編集部を卒業しますが、今後とも末永くマガジン応援しています。